

中国語の親族名称〈爸爸〉について

胡 士 雲

(平成18年 8 月21日受理 最終原稿平成18年10月 5 日受理)

一、はじめに

〈爸爸〉という語彙は、現代漢語（中国語）で常用する親族呼称の一つであり、南北の方言ともに用いる。1933 年、黎錦熙氏は北京『国語週刊』第 98 号に「〈爸爸〉考」という論文を発表した。著者によると、これは『中国大辞典長編』という辞書の原稿から抽出したものという。この論文は資料を博引して〈爸爸〉の由来を詳述し、多くの精緻な見解を述べている。しかし、不十分な箇所もあり、更なる考証の必要があると考える。これが本稿執筆の動機である。さて、黎氏は一連の考証を行った後、次のように述べている。

“爸”實即“父”之本音，章氏《新方言》所謂“古無輕唇，‘魚’‘模’轉‘麻’，故‘父’爲‘爸’”，是也。由於中古以後，“父”字讀音漸異語音，故更造此“從父，巴聲”之形聲字耳。（参考の為、引用の末尾に括弧に括って和訳を掲げる。以下、同じ。〈父〉の元の発音は、実は〈爸〉のようなものであった。章炳麟氏が『新方言』で「古くは輕唇音がなく、〈魚〉韻と〈模〉韻が〈麻〉韻に変化した。だから〈父〉の発音は実は〈爸〉と同じである」と指摘するのは正しい。中古以降、〈父〉の字音は徐々に口頭音と乖離したので、新たに〈父〉の部首と〈巴〉の発音とを合わせた形声字〈爸〉を作ったのである。

黎氏のこの考証は正しい。

しかし、黎氏は論文の初めに、「巴巴（八八、罷罷），爸爸也；父也。」（〈巴巴（八八、罷罷）〉は〈爸爸〉で、父親の意味である。）と指摘し、後文でもまた次のように述べる。

“爸”字造自中古（漢末），其音更能“反之淳古”（顧炎武語；指周時），數千年來流傳於民衆之口中，一直不變（全國方言不聞有呼“父”爲ㄈㄨ者），而今則“爸”爲國語之正音正字矣。明清學者，多忘其本，如《正字通》“爸”字下云：“夷語稱老者爲‘八八’或‘巴巴’，后人因加‘父’作‘爸’字。”此笑話也。其后字書及專著多仍其說。淹博如梁章鉅（清道光間）之《稱謂錄》（卷一），郝懿行（道光間）之《證俗文》（卷四），史夢蘭（同治間）之《疊雅》（卷十三），亦皆引據其說而無所糾正焉。（〈爸〉字は漢末に作られたものだが、顧炎武によるとその音は古代（周代を指す）からのものだ。数千年來、その音は民衆の口頭に伝えられ、ずっと変化していない（現在の全国の方言で父親を fu と呼ぶのを聞いたことがない）。そして現在では〈爸〉は国語の標準音であり、正規の字形でもある。にもかかわらず、明・清期の学者は多くその由来を忘れ、例えば『正字通』

胡 士 雲

は<爸>字の解釈で、「少数民族語では老人を<八八>或いは<巴巴>と呼ぶので、後人は<巴>に<父>を加えて<爸>の字を作った。」と述べている。この解釈は笑止であるが、その後の辞書および著作は多くその説に従っている。例えば梁章鉅（清の道光年間）の『称谓録』（巻一）、郝懿行（道光年間）の『証俗文』（巻四）、史夢蘭（清の同治年間）の『豊雅』（巻十三）等も、全てこれを引用依拠して修正を加えていない。）

筆者（胡）は、黎氏のこの考証には多少独断に失するところがあると考え。その理由として、第一に、唐・宋期から、『旧唐書』（後晋期の官撰）、『元史』（明代初頭の官撰）等の文献に<巴巴、八八、罷罷>等の言い方が見え、黎氏の論文はそれらを父親に対する呼称と指摘するが、もし黎氏の結論が正しいならば、どうして唐・宋・元・明期の文人、とりわけ官撰歴史書の編纂者たちは、既に魏・晋期の『廣雅』に見え且つ合理的な<爸>字（その後の辞書『玉篇』『切韻』等にも収録されている）を用いず、<巴巴、八八、罷罷>等の当て字を用いたのだろうか。第二に、黎氏は『正字通』等の説明を笑止と断じたが、他の文献の用例から見て、<巴巴、八八、罷罷>等の当て字の全てが父親を指すわけではない。このことは、<巴巴>等の当て字と父親を意味する<爸>との間にさほど密接な繋がりがなかったことを示している。また<巴巴>等は、<爸>と異なり、全て二音節で現れていた。第三に、<爸>字は夙に魏・晋期に見えるが、しかし辞書に見える以外、実際の用例としては元・明期に至ってもなお見出し難い⁽¹⁾。それが清代の小説に至って大量の用例が出現し、且つ多く重ね型で現れる。これは何を意味しているのだろうか。

筆者は関係資料の調査検討の結果、以下のように考えた。

第一に、上古（周代）の<父>字は、中古以降に書面音と口頭音とに分化した。そして分化して後、<父>字は書面音の規則に従って変化し続け、一方、口頭音は新たに作られた<爸>字を用いることになった。

第二に、『廣雅』に見える<爸>字は、唐代以後の<巴巴、八八、罷罷>等と由来を異にし、後者は北方の少数民族語に関わると考えられる。発音が<爸>に類する<巴巴>等は、はじめ外来語として漢字表記の典籍に現れたが、字形は一定していなかった。その上、<巴巴>等は、当初は父親に対する呼称とは限らなかった⁽²⁾。父親の呼称として北方地域で次第に定着した後、漢語にもともと存在した<爸>字と合流し、更に南北の広い地域で通用する呼称となった。

第三に、親族呼称発生の規則によれば、多くの親族呼称は専用呼称として使用される当初、大抵はある年齢層を指し示す段階もあった。<巴巴、媽媽、爺爺、奶奶、老老／姥姥>等は、最初は父や祖父の世代に対する通称あるいは尊称でもあったが、後によりやうく特定の親族に対する呼称となった⁽³⁾。先に述べた、古代漢語<父（爸）>の分化、或る少数民族語<爸>の漢語への流入および漢語との合流、これらはこの親族呼称発生の規則に合致する。

二、<父、爸>の字形・字音・字義・用例

§2.1 <父>の字形・字義

<父>字は既に甲骨文の時代には存在した。『甲骨文精萃選読』によると、それは<𠂔>、<𠂔>という字形であった⁽⁴⁾。郭沫若氏『甲骨文字研究』は「父乃斧字初字。石器時代，男

中国語の親族名称〈爸爸〉について

子持石斧（丨即石斧之象形）以事操作，故孳乳爲父母之父。」（〈父〉字は〈斧〉字の本来の字形であった。石器時代、男子は石斧（丨は石斧の象形）を持って操ったので、父母の〈父〉の意味に変化した。）と述べる⁽⁵⁾。王紹新氏『甲骨刻辞時代の語彙』によると、〈父〉字は甲骨文の時代には既に父親の意味に用いられていたという⁽⁶⁾。

『説文解字』では、〈父〉字は〈又〉の部首に属し、「父，矩也。家長率教者。」（〈父〉は、規範である。家長として引率し教える者である。）と説明した。その後の辞書はみな類似の説明をしている。

§2.2 〈爸〉の字形・字義

〈爸〉字の文献資料における初出は、三国魏の張揖の『廣雅』「爸，父也。」（〈爸〉は、父親の意味である。）である。これは後の『玉篇』『廣韻』『集韻』等の辞書にも収録され⁽⁷⁾、『古今通韻』『音韻闡微』『康熙字典』でも同様である。更にその後、明代には〈爸〉字が見え、『改並四声篇海』父部に『俗字背篇』を引用して「爸，父也。」（〈爸〉は、父親の意味である。）、『字彙』父部に「爸，同爸。」（〈爸〉は、〈爸〉に同じ。）とある⁽⁸⁾。

『廣雅』以来、〈爸〉の字義はふつう〈父〉と解釈され、しかも古今を通じて基本的に変化はない。ただそれを共通語とするか、方言とするか、或いは少数民族の言語とするかの違いがあるだけである。例えば、『集韻』去声四十禡韻に「必駕切。吳人呼父曰爸。」（必駕の切。吳人は父親を〈爸〉と呼ぶ。）とあり、『五音集韻』『類篇』もこれと同様である。

§2.3 〈父、爸〉の音声関係

〈父〉字と〈爸〉字の発音に関して、我々が現在知りうる記録は、すべて魏・晋期以降のもので、特に宋代のものが多い。先に紹介した黎氏「〈爸爸〉考」の「‘爸’實即‘父’之本音。」（〈父〉の元の発音は、実は〈爸〉のようなものであった。）⁽⁹⁾という結論は、〈父〉と〈爸〉の音声上の伝承関係を明快に説明している。

上古では〈父〉の発音は「並母魚部」で、推定音はbiwaである。また『説文解字』の徐鉉注は「扶雨切」とし、『廣韻』でも「扶雨切」で、「並母麌韻合口三等」に属し、推定音はbiu上声である。また『集韻』では「奉甫切」で、「奉母麌韻合口三等」に属し、推定音はvu上声である⁽¹⁰⁾。

中古には〈爸〉の発音は三種あった。第一に、『廣雅』曹憲の音注「歩可切」、『玉篇』「捕可切」、『集韻』「部可切」等と見えるもので、推定音はbaである。第二に、『廣韻』「補可切」と見えるもので、推定音はpa上声である。第三に、『集韻』に前掲の反切とは別に「必駕切」と見えるもので、推定音はpa去声である。「古無輕唇、上古魚部轉爲中古的模麻魚韻、中古幫組合口三等輕唇化、濁上變去」（古くは輕唇音がない、上古の魚韻は中古に模・麻・魚韻へと変化する、中古の「幫組合口三等」は輕唇音になる、上声濁音声母は去声に変わる）といった音声変化の規則によれば、〈爸〉は確かに〈父〉の元の音である。換言すれば、〈父〉の中古音は新しい発音で、中古以降の変化は音声変化の規則に合致するのに対し、〈爸〉は字形としては新しいが、発音は古音を保存している、ということになる。

胡 士 雲

§2.4 <父・爸>の用例

<父>字を用いて父親を指し示す用例は、早くも先秦期の漢語に大量に存在し、連綿と今に至っている。例えば：

積善之家，必有餘慶；積不善之家，必有餘殃。臣弑其君，子弑其父，非一朝一夕之故。其所由來者，漸矣。（周易・坤卦文言傳）（善行を積んだ家には、必ず子孫に福が来る。善行を積まない家には、必ず子孫に災難が下る。臣下がその君主を殺し、子孫がその父を殺すという事態は、一朝一夕に成るのではない。事態の進行は、ゆっくり少しずつである。）

嬰聞之：“臣專其君，謂之不忠；子專其父，謂之不孝；妻專其夫，謂之嫉事。”（晏子春秋・内篇・諫下第二）（私（晏嬰）は聞いたことがある。「臣下がその君主を独占すれば不忠、子孫がその父を独占すれば不孝、妻がその夫を独占すれば嫉妬といえる。」と。）

辞書・韻書のほか、<爸>字を文中に用いて父親を指し示す用例は清代に至ってようやく現れ、しかもその多くは<爸爸>の如く重ね型を取っている。例えば、

府裏南門大街西邊小胡同裏，有一家子，祇有父子兩個：他爸爸四十來歲，他女兒十七八歲，長的有十分人材，還沒有婆家。他爸爸做些小生意，住了三間草房，一個土牆院子。（老殘遊記・第六回）（町の南門通り西側の裏通りに、父娘二人で暮らす家が一軒あった。父親は四十過ぎ、娘は十七八の器量良しながら、まだ嫁ぎ先がなかった。父親は細々と商売をし、土壁に囲まれた三間しかない藁葺きの家に住んでいた。）

少停一刻，方必開同了王孝廉也踱過來。趙溫便向他爺爺、爸爸磕頭辭行。（官場現形記・第二回）（暫くして、方必開は王孝廉とゆっくり歩いてきた。趙溫は彼のお爺さん、お父さんに向かって額づいて別れを告げた。）

少奶奶哭够多時，方纔住哭，望着姨媽道：“我恨的父我生我不是個男子，凡事自己作不動主，祇得聽從人家擺布。……我爸爸死了，不用說他；我媽呢，苦守了幾年，把我嫁了。我祇有一個遺腹兄弟，常說長大起來，要靠親戚照應的，我這一去，就和死一樣，我的娘家叫我交付給誰！我是死也張着眼兒的！”（二十年目睹之怪現狀・第八十九回）（若奥さんは長い間泣いて、ようやく泣き止むと、彼女はおば（母の姉妹）を見て言った。「私が恨めしいのは、両親が私を男に生んでくれなかったことです。何事も自分で決められず、ただ人の言う通りにするしかない。……お父さんは既に死んでしまったから、申しません。お母さんは、女手一つで子を育て、数年後に私を嫁がせました。私には父が死んだ後に生まれた弟しかなく、彼が大人になるまでは、親戚の世話にならねばならないといつも言われていました。私が再婚したら、実家にとって私は死んだも同じ、誰に実家を任せたらよいのでしょうか。私は死んでも死にきれません。）

三、現代漢語の方言における<爸>の分布

現代漢語の方言における父親に対する親族呼称は、主に以下のように分類できる。第一：<父>系統、<父、父親>を含む。第二：<爸>系統、<爸、爸爸、阿爸、郎爸、娘爸、依爸、吾爸>を含む。第三：<伯>系統、<伯、伯伯、老伯、阿伯>を含む。第四：<爺>系統、<爺、爺爺、阿爺、爺老子>を含む。第五：<爹>系統、<爹、爹爹、阿爹、大爹>を含む。

中国語の親族名称〈爸爸〉について

第六：〈大〉系統、〈大、大大、阿大、達、達達〉を含む。全体として、各方言は、上記の分類中の一種類だけを用いるとは限らず、二種類以上を用いる方言もある。ただ、二種類以上を用いるものも、一種類を主たる呼称とする。

手元の方言資料を調査した結果、各大方言区を含む 200 以上の方言地点での父親に対する呼称の資料が得られ（詳細は下表を参照。なお、参考の為に、祖父・伯父・叔父等の資料も併記した。）、〈爸〉系の呼称が全国の各大方言区に分布することが明らかになった。具体的に言えば、〈爸〉系の呼称の分布には以下の特徴がある。第一に、〈爸爸、爸〉は、各大方言区に分布する。ただし、湘方言区・贛方言区および江淮官話方言区に属する方言地点では用いないことが多い。第二に、〈阿爸〉は主に粵方言区に分布する。第三に、〈郎爸、依爸、娘爸〉は主に閩方言区に分布する。

方言点	祖父	父親	伯父	叔父
北 京		爸爸pa [˥] ·pa 爸pa [˥]		
哈爾濱		爸爸pa [˥] ·pa 爸pa [˥]		
青 島		爸爸pa [˥] ·pa		
烟 臺	爺爺ie [˥]	爸pa [˥] 爹tie	大爺ta [˥] ·ie 大大一般小孩稱伯父ta [˥] ·ta 大爹ta [˥] ·tie	叔叔cy [˥]
即 墨	爺爺ie [˥] ·ie	爹tie 大ta 爸爸pa [˥] ·pa	大爹ta [˥] ·tie	叔叔fu [˥] ·fu
榮 成	爺爺ie [˥]	爹tie 大ta	伯伯pe [˥] 大爺ta [˥] ·ie 老爹lau [˥] ·tie	叔叔fu [˥]
利 津	爺爺ie [˥] ·ie	爹tie	大爺ta [˥] ·ie	叔叔su [˥] ?
德 州	爺爺ie [˥] ·ie	爸爸pa [˥] ·pa 爹死亡後の稱呼tie	大爺ta [˥] ·ie	伯伯pe [˥] 叔叔死亡後の稱呼su
聊 城	爺爺ie [˥] ·ie	父親fu [˥] ·tɕ'in 爹少ti 爸爸新pa [˥] ·pa 大爺其父親排行爲長ta [˥] ·ie 叔叔其父親排行爲次su [˥] ·su	大爺ta [˥] ·ie	叔叔su [˥] ·su
平 度	爺爺ie [˥] ·ie	爹tie 大ta	大爺ta [˥] ·ie 大大ta [˥] ·ta	叔叔fu [˥]
莒 縣	爺爺ie [˥] ·ie	□□ta [˥] ·ta 爹tie 爺ie / ie 父親fu [˥] ·ts'in	大爺ta [˥] ·ie	叔叔θu [˥]

胡 士 雲

淄 川	爺爺 ʔiə-iə	爺爺 ʔiə 爹 ɛtiə 爸 ʔpa	伯伯 peʔ·pe	叔叔 souʔ·sou
壽 光	爺爺 ɛiə-iə 爺 ɛiə	爺 ɛiə	大爺 taʔ ɛiə	叔 ɛsu
牟 平	爺爺 ɛiə-iə 爺 ɛiə	爹 ɛtiə 爸 paʔ	大爺 taʔ·iə	叔 ʔcy
吉木薩爾	爺爺 ɛiɛ-iɛ	爸爸 ɛpa·pa 達達 ɛta·ta	伯伯 ɛpei·pei 大老子大伯 taʔ ɛlɔ-tsɿ	叔叔 ɛfu·fu
鄭 州	爺爺背 ɛiɛ 爺爺背 ɛiɛ-iɛ 爺爺面 ɛiɛ ɛiɛ	爹背 ɛtie 伯面, 市區 ɛpai 達回民 ɛta	大爺背 taʔ·iɛ 大爺面 taʔ ɛiɛ 老伯回民 ʔlau paiʔ	叔 ʔsu
洛 陽	爺 ɛiɛ	爹 ɛtie 伯面, 回民 ɛpai	伯 ɛpai 大伯 taʔ ɛpai	伯 ɛpai 大伯 taʔ ɛpai
西 安		爸爸 paʔ·pa 爸 paʔ		爸 ɛpa
商 縣	爺 ieʔ	達 ɛta 伯伯 ɛpei·pei 爸爸新 paʔ paʔ	伯伯 ɛpei·pei	大大 taʔ taʔ
西 寧	爺爺 ɛi ɛiɛ 爺兒合音字 ɛiɛ	大大 ɛta·ta 阿大 ɛa ɛta 爹 ɛti	達達 ɛta ɛta	爸爸 paʔ paʔ 爸 paʔ 阿爸回民 ɛa paʔ
太 原		爸爸 paʔ·pa		
忻 州	爺爺背 ɛiɛ ɛiɛ 爺爺呀面 ɛiɛ ɛiɛ ɛia	□背 ɛta □□面 ɛta ɛta	伯伯背 pieʔ pieʔ 伯伯呀面 pieʔ pieʔ ɛia	叔叔背 suəʔ suəʔ 叔叔啊面 suəʔ suəʔ ɛa
和 順	爺爺 ieʔ ieʔ	□背·面 ɛta □□面 ɛta ɛlai	大爺 taʔ ieʔ	伯伯 ʔpai ʔpai
文 水	爺爺 ɛi ɛi	爹 ɛti 大 ɛta	大爺 tərʔ ɛi	老老 ʔlau ʔlau
大 同	爺爺 ɛiɛ ieʔ	父親 fuʔ tɕ'iəv 爹 ɛtie 大大 ɛta taʔ 爸爸 paʔ·pa	大爺 taʔ·iɛ 老爹 ʔlɛo ɛtie	叔叔 ɛsəu·səu
陽 曲	爺爺 ɛiɛ ɛiɛ	□ ɛta	大姥面 taʔ ɛləu 大姥姥背 taʔ ɛləu ɛləu 姥姥背 ɛləu ɛləu	小姥面 ɛɕieu ɛləu 小姥姥背 ɛɕieu ɛləu ɛləu 姥姥背 ɛləu ɛləu
長 治	爺爺祖·外祖 ɛiɛ ɛiɛ	爸爸 paʔ·paʔ	大爹 taʔ ɛtie	爸爸 paʔ·paʔ
成 都		爸爸 ɛpa ɛpa		爸兒 ɛpər
貴 陽		爸爸 ɛpa ɛpa		

中国語の親族名称〈爸爸〉について

漣 水				
蘇 州				
金 華		爸爸pa ² pa		
桐 廬	爺爺 ie ie	阿伯a ² pa ²	伯伯pa ² pa ²	叔叔cyə ² cyə ²
舟 山				
長 沙		爸爸pa ² pa		
衡 陽	爺爺 ie ie	爸爸新 pa pa / pa pa 爹爹 tie tie 爺 ia	伯伯pe ² pe ²	叔叔su ² su ²
臨 武	公官話 kəŋ 公土話 kəŋ	爹爹官話 tie tie 爹爹土話 tie tie	伯父官話 pe fu ² 大爹土話 ta ² tie	叔父官話 su fu ² 爺輩土話 io pai ²
婁 底				
南 昌		爸爸pa ² pa ²		
萍 鄉		爸爸 pa pa		
廣 州		爸爸 pa pa 阿爸 a ² pa		
南 寧		爸pa ²		
厦 門		老爸lau ² pe ² 阿爸 a pe ² 娘爸 niu ² pe ²		
福 州		郎爸 nouŋ ma ² 依爸 i pa		
永 春	阿公 a kəŋ 公 kəŋ	阿叔 a tse ² 叔tse ² 阿爹 a tia 爹 tia 爸 pa	伯pe ² 伯公pe ² kəŋ	叔tse ² 叔公tse ² kəŋ
海 口	爸?ba ² 阿爸a ² ?ba ²	爸?ba ² 阿爸a ² ?ba ² 長入		叔爸tsip ² ?be ²
涪 水	爹 tie	父fu ² 爺 ie	爺 ie	爺 ie 細父ci ² fu ²
梅 縣		阿爸 a pa		
于 都		爸爸 pa pa		

しかし、今回依拠した資料はすべて 20 世紀 80 年代以降の比較的新しい方言調査の結果である。もし 5、60 年代あるいはそれ以前の方言調査資料に拠れば、両者の間に多少の差異が見られるであろう。例えば、陳章太氏・李行健氏の『普通話基礎方言基本詞彙集』（1996 年）には、成都・南充・達県・漢源・西昌・自貢・重慶等の元四川省に属する方言地点の全てに〈爸〉

胡 士 雲

系の呼称を記録するが、楊時逢氏の『四川方言調査報告』（1984 年）^{（11）}では、記された全 134 の方言地点のうち＜爸＞系の呼称が記録されるのは 39 地点のみで、全地点の 3 割に満たなかった。また前掲『普通話基礎方言基本詞彙集』は、徐州・連雲港・漣水・揚州・南京・南通等の 6 つの江蘇省の方言地点のうち、徐州・連雲港・揚州・南通等の 4 地点において＜爸＞系の呼称を記録するが、『江蘇省與上海市方言概況』（1960 年）では、徐州・南通の 2 地点にしか記録がなかった。その他、錢乃榮氏『当代吳語研究』（1992 年）は、全 33 地点のうち、蘇州・温州の 2 地点を含む 26 地点で＜爸＞系の呼称を記録するが、『漢語方言詞彙』（1964 年）では、蘇州・温州の 2 地点での記録がなかった。

このような記録の相違には二つの原因が考えられる。一つは、方言調査自身の問題で、その方言に＜爸＞系の呼称があるにもかかわらず、何らかの事情により調査者がそれを把握し得なかったということが考えられるが、このような可能性は比較的小さいであろう。いま一つは、共通語の影響の可能性で、一部の方言地点では元来＜爸＞系の呼称がなかったが、この数十年來の共通語の普及や新聞・テレビ等のメディアの大衆化により共通語の影響を受け、知らず知らずのうちに＜爸＞の呼称を使うようになっていたということが考えられる。

四、関連問題の調査と研究

§4.1 ＜八八、巴巴、罷罷＞等について

＜爸＞字の他に、宋・元期以降の辞書および文人の筆記には＜八八、巴巴、罷罷、耙耙、郎罷、郎伯、阿伯、阿八、肥＞等の語が見えるが、これらの語は以下の二種に分類できる。

一種は漢語方言の語彙で、＜郎罷、郎伯、阿伯＞等を含め、父親に対する呼称である。例えば、梁章鉅『称谓録』は「郎罷、郎伯」の条で次のように説明している。

《天中記》：“閩人呼父曰郎罷。”亦見吳處厚《青箱雜記》。案：顧況《因》詩：“郎罷別因，吾悔生汝。及汝既生，人勸不舉。不從人言，果獲是苦。因別郎罷，心摧血下。隔地絕天，及至黃泉。不得在郎罷前。”自注：“因音蹇。閩俗呼子爲因，父爲郎罷。”又黃庭堅《送秦少游》詩：“但使新年勝故年，即如常在郎罷前。”一本郎罷作郎伯。（『天中記』には、「閩（福建）の人は父親を＜郎罷＞と呼ぶ」と記し、同様の記載が吳處厚の『青箱雜記』にも見える。唐の顧況の「因」詩に、「郎罷（父親）は子供と別れ、お前を生んだのが悔まれる。お前が生まれた時、養育せずに死なせてしまえと人が勧めた。その意見に従わず、果たしてこんな苦しみを招くこととなった。子供は郎罷（父親）に別れ、心が裂かれ血が滴る。この世を遠く離れて、黄泉の世界に至るまで。父親の前に姿を見せることはできまい。」とあり、その自注に「＜因＞は＜蹇＞と同音。閩（福建）地方の習慣で、子供を＜因＞と呼び、父を＜郎罷＞と呼ぶ。」とする。また宋の黄庭堅の「送秦少游」詩に、「新年が旧年よりよいならば、いつも郎罷（父親）の前に居られよう。」別の版本では「郎罷」を「郎伯」としている。）

清の鄭珍『親属記』の「郎罷」の条には『称谓録』と同じ資料を引用し、また「阿伯」の条に、「吳俗稱父爲阿伯。」（吳の習慣では父を＜阿伯＞と呼ぶ。）と記している。

別の一種は、漢語ではなく少数民族語の語彙で、＜八八、巴巴、罷罷、耙耙、阿八、肥＞を

中国語の親族名称〈爸爸〉について

含む。これらの語彙は意味によって三種類に分けられる。以下、それを具体的に示す。

第一に、〈八八、巴巴〉等は「老成人」（経験豊富で物事に習熟した年配者）を指す。明の方以智の『通雅』巻十九「呼謂」の条は次のように記す。

“八八”乃遙語之稱，“巴巴”也。《唐書》：“德宗以懷光外孫燕八八爲後。”“八八”，蓋遙語稱老成者曰“八八”，或“巴巴”。今回回教以老成者呼“八八”，其聲近“把”。《仙傳》：“陶八八，肅宗時道士，以丹授顏真卿者。”（〈八八〉は少数民族語の呼称で、〈巴巴〉である。『唐書』に「徳宗は懷光の外孫の燕八八を子孫とする。」とあり、その〈八八〉とは、思うに少数民族語で「老成人」を指し、〈巴巴〉とも言う。現在、イスラム教でも「老成人」を〈八八〉と言い、その発音は〈把〉に近い。『仙伝』に「陶八八は、唐の肅宗時代の道士で、靈藥を顏真卿に授けた者である。」と見える。）

また『称谓録』の「八八・巴巴・爸」の条は『正字通』を引用して次のように言う。

夷語稱老者爲八八或巴巴，後人加父作爸字。吳人稱父曰爸。《廣雅》：“爸，父也。”

（少数民族語では老人を〈八八〉或いは〈巴巴〉と呼び、後代の人が〈父〉を加えて〈爸〉字となった。吳の地域では父親を〈爸〉と言う。『廣雅』に「爸は、父親の意味である。」とある。）

第二に、〈罷罷、巴巴、耙耙、八八〉等は父親を指す。『称谓録』の「罷罷」の条に「關東稱父爲罷罷。」（東北地方では父親を〈罷罷〉と呼ぶ。）と言い、また『親属記』の「爸」の条に次のように言う。

捕可切。《廣雅》、《玉篇》：“爸，父也。”按：古讀巴如逋，即父之重唇音，遂作巴，加父。今俗呼父或巴巴，或爲耙耙，或爲八八，并此字。（〈爸〉は捕可の切。『廣雅』『玉篇』は「〈爸〉は父親の意味である。」と記す。考えるに、古代では〈巴〉の発音は〈逋〉に同じ、即ち〈父〉の重唇音であり、〈巴〉と言う字を書き、更に〈父〉を加えたのである。今、俗に父親の呼称として〈巴巴〉や〈耙耙〉〈八八〉等の字を使うが、みなこの〈爸〉字である。）

第三に、〈阿八、𦵏〉等は母親を指す。『親属記』の「八 別作𦵏」の条に次のように言う。

按：《昌黎集・祭孥女文》云“阿爹阿八”，自來無注。阿八者，退之行次十八，不得爲八。餘謂阿八是孥女之母也。時俗呼父爲爹，呼母爲八，故退之云“阿爹阿八遣某祭孥耳”。其祭周氏侄女、李氏侄孫女及侄孫滂文，并稱夫婦祭之。可見，時以有此稱，因造𦵏字。《集韻》《類篇》“𦵏，母也”。其字不見《玉篇》《廣韻》，則知𦵏是唐人因八而制。王念孫《廣雅疏證》以《集韻》《類篇》𦵏字爲采《廣雅》訛文，蓋未考此。今世呼伯叔或曰八、或曰八八，則與唐異。（考えるに、『昌黎集』「祭孥女文」（韓愈が夭逝した娘の孥女を祭る文）に「阿爹阿八」と見えるが、これまで注釈はなされていない。「阿八」について、韓愈の排行は十八だから「八」ではありえない。私は「阿八」は孥女の母親を指すのだと思う。当時の習慣では父親を〈爹〉と呼び、母親を〈八〉と呼んだので、「阿爹阿八が某にお前を祭らせる」と言ったのである。それ以外に韓愈は、周氏の姪、李氏の兄弟の孫娘、兄弟の孫の滂、等への祭文でも夫婦の呼称を並べ記している。ここから、当時、母親を〈阿八〉と呼んだことにより〈𦵏〉字が作られたということが看取できる。

胡 士 雲

『集韻』『類篇』には「肥とは、母親の意味である」と記すが、『玉篇』『廣韻』にはこの字が見えない。この事実から、＜肥＞字は唐代の人が母親のことを＜八＞と呼んだことから作られたものとわかる。王念孫『廣雅疏証』が、『集韻』『類篇』に＜肥＞字が記されるのは『廣雅』の訛誤字を採録したからだと考えたのは、唐人が母を＜八＞と呼称したことに考え至らなかったからであろう。現在、世間で伯父・叔父のことを＜八＞或いは＜八八＞と呼ぶのは、唐代の呼称と異なる。）

§ 4.2 <八八>等が少数民族語である可能性

上述の＜八八、巴巴、罷罷、耙耙、阿八、肥＞等の語は本当に少数民族語であろうか。筆者はその可能性が高いと考える。以下、二つの観点からこの問題を考察したい。

§ 4.2.1 <八八>等の漢語文献における使用頻度の低さ

筆者は電子データベースを利用し、＜八八＞等の語の用例を『四庫全書』全文において網羅的に調査した。大量の用例が得られるものと期待したが、結果は予想に反し、『四庫全書』における＜八八＞等の用例の極めて少ないことがわかった。

1、八八。『四庫全書』の調査結果では、隋・唐期には＜八八＞を親族呼称として用いた例は一例もなく、苗字の後に＜八八＞を付す例もない。後代の資料中、唯一『通雅』が『旧唐書』に見える「燕八八」について「＜八八＞は少数民族語で、年輩者を指す」（前掲）と述べるのみである。他に、五代に書かれた『旧唐書』に「燕八八」が2例見え、宋代期の資料に4例、元代に1例、明代に3例の用例がある。ただし、これらの用例は、すべて同一人物・同一事、すなわち唐徳宗の貞元五年（789年）に皇帝が詔書を発し、功臣李懐光の後をその外孫である燕八八に継がせ、李承緒なる名を賜ったこと、に関する記述である⁽¹²⁾。また、宋代に「陶八八」が3例、元代に1例、明代に2例、清代に4例があり、それらも同一人物・同一事、すなわち唐代の顔真卿が若い頃に道士の陶八八に出会い、道士から一匙の碧霞丹なる靈薬を授かったこと、に関する記述である⁽¹³⁾。

2、巴巴。『四庫全書』の調査結果では、隋・唐期に＜巴巴＞を親族呼称として用いた例は一例もなく、苗字の後に＜八八＞を付す例もない。＜八八＞と同様に、後代の資料中、『通雅』が「＜八八＞は少数民族語で、年輩者を指す。＜巴巴＞に同じ。」と述べるのみである。清代の資料（前王朝の事跡を述べた資料も含む）には、例えば＜丹巴巴克実、安巴巴図嚕、阿勒巴巴雅濟呼＞の如く、多くの人名や地名に＜巴巴＞を含む語が見えるが、これらは＜丹巴巴克実＞を例に言えば、＜丹巴＞と＜巴克実＞との複合語であり、＜巴巴＞を一語とするものではない。⁽¹⁴⁾

3、罷罷。『四庫全書』の調査結果では、隋・唐期に＜罷罷＞を親族呼称として用いた例は一例もなく、苗字の後に＜罷罷＞を付す例もない。また、後代の資料にも見えない。

4、耙耙。『四庫全書』の調査結果では、隋・唐期に＜耙耙＞を親族呼称として用いた例は一例もなく、苗字の後に＜耙耙＞を付す例もない。また、後代の資料にも見えない。

5、阿八。『四庫全書』の調査結果では、隋代に＜阿八＞を親族呼称として用いた例は

中国語の親族名称<爸爸>について

ない。唐代には3例有るが、全て韓愈「祭女挈女文」から出たもので、実質的には1例だけである⁽¹⁵⁾。後代の資料にも僅かに見えるが、しかし全て韓愈「祭女挈女文」に関連して述べたものである。例えば、宋の趙彦衛『雲麓漫抄』卷三に、「韓退之《祭女挈文》自稱曰阿爹阿八，豈唐人又稱母爲阿八，今人則曰媽。」（韓退之「祭女挈文」に「阿爹阿八」と自称するが、唐代の人は母親を阿八とも呼んだのか。今の人には媽と言うが。）しかし、この「阿八」について、清の閻若璩は『潜邱筭記』で、母親を指すものではなく、韓愈が娘に対して自分の排行である十八の「十」を省略して阿八といったものである、と述べている⁽¹⁶⁾。その他、宋代の資料『樂書』は、唐代に「李阿八」なる人名が存在したことを明記している。

6、肥。『四庫全書』の調査結果では、隋・唐に<肥>を親族呼称として用いた例は一例もない。また、後代の資料にも見えない。

『四庫全書』以外の資料においても、『四庫全書』の場合と同様、<八八>等の語句の使用頻度は低い。数少い用例のうち、「<爸爸>考」所引の俞樾『茶香室叢鈔』三「巴巴媽媽」を例として挙げよう。

明王文祿《龍興慈記》云：“季巴巴、王媽媽，聖祖微時有恩鄰人也。登極后，召至，命工部造房興居，官其子。”按“巴巴”俗呼父也，字亦作“爸”。此二人殆翁媼歟？明文林《琅琊漫鈔》云：“趙氏乾娘，高皇義父之妻也，世襲指揮。”按此，知明高皇有義父、乾娘；季巴巴、王媽媽殆亦此類歟？（明の王文祿の『龍興慈記』に「季巴巴・王媽媽は、洪武帝が貧しかった時の恩人で隣近所の人である。洪武帝が即位後、二人を召し出し、彼らのために工部に命じて住宅を建てさせ、彼らの子孫に官職を与えた。」と記す。考えるに、<巴巴>とは父親の俗称で、字は<爸>とも書く。この二人は爺婆（老齡の男女）であろうか。明の文林の『琅琊漫鈔』には「趙氏乾娘（義母）は、洪武帝の義父の妻であり、指揮の職を世襲した。」とある。ここから、明の洪武帝に義父・義母がいたと分かる。「季巴巴・王媽媽」というのも、大体これと同じものではないだろうか。）

このように<八八>等の用例は有るには有るが、極めて少なく、よってその意味も判然としない。

<八八>等の文献中の頻度がこれほど低いのは何故か。筆者は、それらがもともと漢語固有の呼称ではなかったからだと考える。もしそれらが漢語固有の呼称であれば、これほど用例が少ないはずはなかろう。一步譲って、たとえそれらが父親を指す漢語の呼称であったとしても、少なくとも主要な呼称ではなかったと言える。

§4.2.2 <八八>等の語の字形の流動性

文献資料中において<八八、巴巴、罷罷、耙耙、阿八、肥>等の字形は一定していない。具体的に言えば、第一に、<八八、巴巴、罷罷、耙耙>はみな同義で、ただ文字形式に違いがあるだけである。第二に、前掲の『親属記』が、唐代の人が母親を意味する<阿八>のために<肥>字を作ったと説明するように、<八>と<肥>は同義で、ただ字形が異なるだけである。第三に、人名に用いられる<八、巴>等の字には、さらに別の字形も有る。例えば、『旧五代

胡 士 雲

史』蕭翰伝に「蕭翰者、契丹諸部之長也。父曰阿巴。」（蕭翰は、契丹諸部の長で、その父の名を阿巴と言った。）と見え、これに関して『考証』は「阿巴舊作阿鉢，今改。」（「阿巴」はもとは「阿鉢」と書かれていた、いま改める。）と述べている。また『重訂契丹国志・譯改国語解』に「達蘭阿巴。蒙古語，達蘭，七下數也；阿巴，圍也。原作撻覽阿鉢，今改正。」（「達蘭阿巴」（人名）は蒙古語で、達蘭は七下数、阿巴は囲むの意味である。もとは「達撻阿鉢」と書かれていたが、いま改める。）と述べている。

このような字形の流動性は、他の言語が漢語に翻訳される時、特に翻訳の初期にしばしば見られる現象であり、多言を要すまい。その上、上述の文字が用いられる人物はもともと漢民族ではなく、よって当然その名前も漢語でないからには、その漢語表記が一定しないのも当然である。

その他、＜八八＞等の語の音韻も＜爸＞字と一致しない。漢語の音韻から言えば、＜八＞は「幫母黠韻開口二等」、＜巴＞は「幫母麻韻開口二等」、＜耙＞は「並母禡韻開口二等」、＜罷＞は「並母蟹韻開口二等」に属する。このように唐代においてこれらの音韻は明らかに異なり、現在でも区別がある。しかし、翟灝の『通俗編』の見解、すなわち、現在の＜爸＞字は「隨方俗高下，轉爲四聲：讀平曰‘巴’，上曰‘把’，去曰‘霸’，入曰‘八’。」（方言によってその発音は高い低いの違いを生じ、声調の違いとなった。そして、平声には＜巴＞字、上声には＜把＞字、去声には＜霸＞字、入声には＜八＞字を用いるようになった。）という見方については、筆者は牽強付会であると考ええる。

§4.3 ＜八八＞等の語の由来について

＜八八＞等の語は少数民族語と考えられるが、では一体どの民族の言語に由来するのか。この問題を解くには、先ず中国北方の少数民族語の観点から考察すべきである。

第一に、上述の人名は多く蒙古族あるいは満州族の人名で、この点から見ると、＜八八＞等は蒙古語あるいは満州語に由来すると考えられる。

第二に、馬叙倫は『石屋余瀟』で次のように述べている。

《水滸》中潘金蓮呼西門慶爲“達達”。頃見某報有文，考爲蒙古語。以《綠野仙踪》有“親達達”，及“達達”與“媽媽”對舉者考之，則“達達”即“爸爸”或“爹爹”之轉音。聞川伎呼狎客于淫褻時亦如此。（『水滸伝』で潘金蓮が西門慶を「達達」と呼んでいる。最近見かけた某新聞の一文に、それが蒙古語であると考証していた。『緑野仙踪』に「親達達」という語が見え、「達達」と「媽媽」とがペアで使われていることからすると、「達達」とは、＜爸爸＞あるいは＜爹爹＞の音に変化した音に近似の漢字を当てた語彙であろう。聞くところによると、四川の娼婦は床で遊び客をこのように呼ぶそうである。）

また清の陳恒慶『諫書稀庵筆記』は「旗人呼其父曰爸爸」（満州族の人は父親を爸爸と呼ぶ）と記している。また黄濬『花随聖人庵撫憶』には次のような記述が有る。

西后手指諸女，語德宗曰：“皇帝，誰堪中選，汝自裁之。合意者即授以如意可也。”言時，即將如意授與德宗。德宗對曰：“此大事，當由皇爸爸主之（據宮監謂，當時稱謂如此）。”（西太后は女性たちを指して、光緒帝に言った「皇帝、誰を選ぶのか、自ら決め

中国語の親族名称<爸爸>について

なさい。気に入った者には如意を授けるがよい。」そう言うと、如意を徳宗に授けようとした。すると光緒帝は「これは大事なので、皇爸爸に決めていただきます。」と答えた（宦官によると、当時の呼称はこのようであった。）

この三つの記述からすると、<爸爸>は、父親を指すにしろ、母親を指すにしろ、蒙古語あるいは満州語に由来するものである。

第三に、音声の類似性という観点から、例えば『中国少数民族語言簡志』に拠って、少数民族語のうち、父親あるいは母親に対する呼称で<爸>の発音に類するものを挙げれば、以下の通りである。

壯 語（チワン語）：	父親pa ³⁵	傈 傈 語（リス語）：	父親a ³¹ ba ³¹
黎 語（リー族語）：	父親pha ¹¹	哈 尼 語（ハニ語）：	父親a ³³ pa ³¹
仡 佬 語（コーラオ語）：	父親p ⁴⁴	土 家 語（トゥチャ語）：	父親a ²¹ pa ⁵⁵
苗 語（ミャオ族語）：	父親a ³⁵ tɕa ⁴⁴ , a ³⁵ pa ³¹	西部裕固語（西部ユグ語）：	父親ava
畚 語（シャオ語）：	父親a ²² pa ²²	維 吾 爾 語（ウイグル語）：	母親ana, apa
羌 語（羌 語）：	父親pi ⁵⁵ , pa ⁵⁵ pa ³³	撒 拉 語（サラール語）：	父親aba, ada
獨 龍 語（トールン語）：	父親a ³¹ pai ⁵³ , a ³¹ ba ⁵³	蒙 古 語（モンゴル語）：	父親aab
藏 語（チベット語）：	父親pa ⁵⁴ pa ⁵⁴	東 郷 語（トンシャン語）：	父親awi, aba
門 巴 語（メンバ語）：	父親a ⁵⁵ pa ⁵⁵	土 族 語（トゥー族語）：	父親aaba
阿 昌 語（アチャン語）：	父親a ²¹ pha ²¹	東 部 裕 固 語（東部ユグ語）：	父親baba,
載 瓦 語（ザイワ語）：	父親a ⁵⁵ va ²¹		tjiye, ad3a

これによると、南方北方に関わらず、各少数民族語すべてに<爸>の発音に類した父親に対する呼称が存在し、且つこれらの少数民族語は言語の系統も異なる。それで、<八八>等がどの民族語に由来するのか判断が難しい。<八八>等はやはり北方の少数民族語に由来すると筆者は見るが、それを示すためには更に多くの資料を検討した上で説明を加えなければならない。

§ 4. 4<爸爸>の全国共通語化

おおよそ宋代から漢語中の二音節の親族呼称が次第に増加し始め、且つ口語における親族呼称の多くも重ね型を用いた⁽¹⁷⁾。清代以来、『官場現形記』『孽海花』『老残遊記』『二十年目睹之怪現狀』『品花宝鑑』『兒女英雄伝』等の多くの白話小説で<爸爸>という呼称が使われ始めた。その後の文学作品の用例は更に多くなり、やがて<爸爸>は漢語の一般的な呼称となるに至ったのである。

五、終わりに

筆者はかつて拙著『漢語的親族称谓系統（中国語の親族名称）』⁽¹⁸⁾において、「龐雜紛繁」（厖大かつ繁雑）という表現で漢語の親族呼称のシステムを総括した。

説漢語親屬稱謂“龐雜”，含義有二：第一，數量非常多，各種不同的親屬關係都有

胡 士 雲

與之相對應的親屬稱謂，遠親、近親，直系、旁系。……第二，詞義交叉嚴重，同一個稱謂形式表示好幾種親屬關係，同一個親屬關係又有好幾個稱謂形式。（漢語の親族呼称を「龐大」と言うのには、二つの意味がある。第一に、量が非常に多く、血縁関係の遠い・近い、直接・間接…を問わず、各種の親族関係には全てそれに対応する呼称があること。第二に、語義の交錯が甚だしく、同一の呼称形式が数種類の親族関係を表し、また同一の親族関係に数種類の呼称形式が有ることである。）

説漢語親屬稱謂“紛繁”，也有兩個含義：一是漢語的歷史悠久，古今留下的親屬稱謂層層疊疊，使人不容易一下子理清；二是漢語方言的分歧很大，不同方言之間的稱謂也存在着一定的差異。（漢語の親族呼称を「繁雜」と言うのにも、二つの意味が有る。第一に、漢語の歴史は悠久で、古今の資料に記された親族呼称は何重にも重なり、簡単にはその発展の経緯を把握することができないこと。第二は、漢語の方言差が非常に大きく、各方言間の呼称にも相当程度の相違が存在することである。）

漢語の親族呼称が、このような「龐雜紛繁」（龐大かつ繁雜）の状況に至った原因は何か。勿論それを一言で述べることはできない。その原因には、漢民族の伝統と価値観、言語自身の変化、また伝承中の訛誤などが挙げられる。他にまた、言語使用の側面、方言の分化、他の言語との接触といった原因も考えられる。＜爸爸＞についてその成立の経緯を総括すれば、＜父＞から＜爸＞字が生まれたのは言語自身の発展変化によるものであり、少数民族語の父親に対する呼称が漢語の＜爸＞と合流し更に使用範囲を拡大していったのは、言語の接触と使用とによるものであると言えよう。

漢語の親族呼称が何故これほど複雑になったのか、その原因の探求は、漢語の親族呼称システムを整理する上で極めて重要であろう。

注釈：

- (1) 13世紀に作られた朝鮮の中国語教科書《老乞大》には“爸爸”等の呼称がない。
- (2) 『喻世明言』第十八卷に次の例がある。「王興夜間起來出恭，聞得廊下哀號之聲，其中有一個像關中聲音，好生奇異。悄地點個燈去，打一看，看到楊八老面貌，有些疑惑，問道：‘爸爸們既說不是真倭，是那裏人氏？如何入了倭賊伙內，又是一般形貌？’」（王興は夜中に用をたしに起きると、廊下で号泣する声が聞こえた。その中からは関中なまりの聲がして、王興はとても奇異に思った。こっそりと明かりをつけて見に行った。楊八老の顔を目にとると、すこし合点がゆかないので尋ねた、「“爸爸”達は本当の日本人でないとおっしゃっていましたが、いったいどこの方ですか。またどのようにして日本人の盗賊の群れに入り、そのうえ同じ容貌なのですか。」）この例の“爸爸”は相手に対する尊称と考えられる。
- (3) 『醒世恒言』第二十卷に次の例がある。「話說國朝自洪武爺開基，傳至萬曆爺，乃第十三代天子。那爺爺聖武神義，英明仁孝，真個朝無幸位，野沒遺賢。」（そもそも、明朝は洪武爺（洪武帝）の開国から受け継がれ、万曆爺（万曆帝）は第十三代の天子であります。その“爺爺”（皇帝）は武勇と正義にすぐれ、賢明にして仁孝、まことに朝廷に能無くして位に就く者はなく、賢者でありながら野に在る者はありません。）また、第三十七卷に次の例がある。「子春道：“既然老師不允，容弟子改過自新，三年之

中国語の親族名称<爸爸>について

後、再來效用。”老老道：“你若修得心盡時，就在家裏也好成道，若修心不盡，便來隨我，亦有何益，慎之！勉之！”（子春は言った、「先生が許可してくれないからには、弟子（子春）は心を入れ換えて、3年後に改めて参ります。」“老老”は言った、「お前が心を尽くして修行すれば、家でも悟りは開ける。そうでなければ、私に就いて修行しても何の意味もない。慎み、努めよ。」）また、第三卷に次の例がある。「秦重道：“祇怕媽媽不作成。若還遲，終無失，就是一萬年，小可也情願等着。”九媽道：“恁地時，老身便好張主！”（秦重が言った、「ただ“媽媽”が機会をくれないのが心配です。もし遅くなっても、確実に機会があるならば、たとえ一万年でも、小生は喜んで待ちます。」九媽は言った、「それならば、私が機会を作ってあげましょう。」）

（4）王宇・楊昇南・聶玉海 主編『甲骨文選読精萃』、中国・語文出版社、1996年。

（5）郭沫若『甲骨文字研究』、科学出版社、1962年。

（6）王紹新「甲骨刻辞時代の詞彙」、程湘清主編『先秦漢語研究』、山東教育出版社、1982年、所収。

（7）『玉篇』父部、第二十五「爸：捕可切，父也。」（爸、捕可の切、父親の意味である。）、『廣韻』上声、三十四果「爸，父也，捕可切。」（爸、父親の意味、音は捕可の切である。）、『集韻』上声、三十四果「爸，部可切。爸，爹，父也。」（爸、音は部可の切、爸、爹，父親の意味である。）、と見える。

（8）『漢語大字典』（四川辞書出版社・湖北辞書出版社、1985年）父部を参照。また『中文大辞典』（中国文化学院出版部、1967年）父部に、「爸，與爸同。一曰爸字之訛。《字匯》：爸，同爸。《篇海》：爸，爸字之訛。」（爸、爸に同じ。一説に爸の字の訛誤とも言う。『字彙』「爸、爸に同じ」、『篇海』「爸、爸の字の訛誤」とある。）とある。

（9）清・王念孫『廣雅疏証』（江蘇古典籍出版社、1984年）第六卷下・釋親に、「爸者，父聲之轉。」（爸というのは、父の音の変化である。）とある。

（10）郭錫良『漢字古音手冊』（北京大学出版社、1986年）は、<父>の上古音はbiwaであり、『廣韻』では音はbiuである、とする。

（11）楊時逢『四川方言調査報告』の出版は1984年だが、その資料は20世紀の40年代に調査したものである。

（12）『旧唐書』卷百二十一、李懷光伝に次のように見える。「渤海靺鞨人也。貞元元年……懷光死，時年五十七。尋詔以一男爲嗣，賜莊宅各一所，仍還懷光尸首，任其收葬，妻子并徙澧州。五年，又詔曰：……宜以懷光外孫燕八八賜姓李氏，名承緒，……承懷光之後。」（李懷光は渤海靺鞨地区の人である。貞元元年……懷光は死去した。五十七歳であった。その後すぐに、詔を下して、一人の男性を探して跡継ぎとし、別荘と住宅を一つずつ賜り、そして懷光の死体を返して埋葬を任せ、妻と子供は共に澧州に移らせた。五年、また詔を下して言った、「……懷光の外孫の燕八八に李氏という苗字を賜い、承緒と名づけ、……懷光の跡継ぎとするがよい。」）また別に宋・袁枢『通鑑記事本末』三十三卷にも次のように見える。「初，上思李懷光之功，欲有其一子，而子孫皆已伏誅。戊辰，詔以懷光外孫燕八八爲懷光後，賜姓名李承緒，除左衛率府曹參軍，賜錢千緡，使養懷光妻王氏及守其墓祀。」（以前、皇帝は李懷光の功勞を考慮し、跡継ぎを残すため一人の子の罪を許したいと思ったが、子孫は全てすでに死刑に処せられた。戊辰の年、詔を下して、懷光の外孫の燕八八を懷光の跡継ぎとし、李承緒という姓名を賜り、左衛率府曹參軍の官職を授与し、千緡の錢を賜り、懷光の妻の王氏を扶養し、懷光の墓と祭祀とを守らせた。）

胡 士 雲

(13) 宋・曾慥編『類説』卷十二「顔魯公屍解」に次のように見える。「顔真卿問罪李希烈，内外知公不還，親族餞於長樂坡，公醉，跳躍前楹曰：“吾早遇道士云陶八八，授刀圭碧霞丹，至今不衰。”（顔真卿が謀反した李希烈のを責めに赴くに当り、みな顔真卿が無事に帰れないことを知り、親族たちは長樂坂で餞別の宴を設けた。公は酔って、前の柱に飛び上がって言った、「私は以前に陶八八という道士に会い、一匙の碧霞丹なる薬を授けられから、今に至るまで衰えを知らぬ。」）」

(14) 『欽定元史語解』卷十二、人名に次のように見える。「丹巴巴克實，丹巴，唐古特語，教也；巴克實，師也；卷十一作丹八八合赤。」（「丹巴巴克實」の「丹巴」は唐古特語（タングート族の言葉）で、教えるの意味である。「巴克實」は、先生の意味である。卷十一には「丹八八合赤」に作る。）また卷十四に次のように見える。「安巴巴圖魯，滿洲語；安巴，大也，巴圖魯，勇也，卷二十一作暗伯拔突。」

（「安巴巴圖魯」は満洲語で、「安巴」は、大きいの意味である。「巴圖魯」は勇敢の意味である。卷二十一には「暗伯拔突」に作る。）また卷二十一に次のように見える。「阿勒巴巴雅濟呼，阿勒巴，官差也，巴雅濟呼，富也，卷一百三十三作愛伯伯牙兀。」（「阿勒巴巴雅濟呼」の「阿勒巴」は、役人の意味である。「巴雅濟呼」は、富の意味である。卷一百三十三には「愛伯伯牙兀」に作る。）

(15) 韓愈「祭女孿女文」に「維年月日，阿爹阿八使汝姊以清酒時果庶羞之奠，祭于第四小娘子孿子之靈。」（これ某年某月某日、阿爹と阿八はお前の乳母を遣わして清い酒と季節の果物とご馳走を供物とし、四番目の娘である孿子の霊を祭る。）とある。

(16) 『潜邱筭記』卷六に次のように見える。「韓昌黎《祭十二郎文》，十二郎，韓之姪也。文自稱季父愈，此即所說令叔可稱名之證也。《祭女孿女文》，女孿，韓之女也，文自稱阿爹阿八，此即所說尊公不宜稱名者也，豈惟父即姪孫自亦不名。《祭滂文》曰十八翁及十八婆盧氏，盧于滂爲叔祖母，以異姓故，別曰盧氏。昌黎行十八，對女曰阿八，省一十字也。」（韓昌黎「祭十二郎文」の十二郎とは、韓のおいである。文では韓愈は「季父愈」と自称しており、これは叔父がおいに対して直接名前を称することのできる証拠である。「祭女孿女文」の女孿は韓愈の娘である。この文では韓愈は「阿爹阿八」と自称しており、これは父が娘に対して直接名前を称することのできないことを示している。父だけではなく、兄弟の孫に対してもやはり名前を言えないのである。「祭滂文」では韓愈は〔自分と妻の盧氏のことを〕「十八翁」「十八婆盧氏」と称している。盧氏は滂にとって従祖母（おおおば）に当たり、異姓だから区別して盧氏と言ったのである。昌黎の排行は十八なのに、娘に対して阿八と称したのは、十の字を省いたのである。）

(17) 筆者の知る資料は多く宋以後に見えるものであるが、二音節の呼称・重ね型の呼称は、あるいは宋代以前に遡るかも知れない。親族呼称だけではなく、当時の人名の中にも重ね型のものがある。例えば明・徐応秋『玉芝堂談薈』卷十四は次のように言う。「男子雙名者，夏主赫連勃勃，吐蕃將且藏結結，國相尚婢婢，唐琵琶客羅黑黑，樂工紀孩孩，劍客精精兒、空空兒，李懷光外孫燕八八，元學士承旨庫庫，平章政事回回，右丞相脱脱，太傅王保保，學士馬馬。婦人雙名者，隋煬帝宮婢羅羅，元微之傳崔鶯鶯，又範十郎女鶯鶯，張建封妾盼盼，開元中官妓薛瓊瓊，宋宣仁太后小名滔滔，朱端明取妓馬瓊瓊，杜牧之所狎妓張好好，元微之所歡妓謝好好，畫中美人真真，又沈將軍妾真真，又元名妓趙真真，同時馮蠻蠻，妾趙真真，錢塘妓蘇小小，達希盈盈，官妓灼灼，王山所接仙女吳盈盈。」（男子の双名の者は、夏の王の赫連勃勃、吐蕃の將軍の且藏結結、國相の尚婢婢、唐の琵琶客の羅黑黑、樂器工の紀孩孩、劍客の精精兒、空空兒、李懷光の外孫の燕八八、元の學士の承旨倉倉、平章政事の回回、右丞相の脱脱、太傅の王保保、學士

中国語の親族名称〈爸爸〉について

の馬馬、などである。婦人の双名の者は、隋煬帝の宮婢の羅羅、元微の子の崔鶯鶯、また範十郎の娘の鶯鶯、張建封の妾の盼盼、開元中の官妓の薛瓊瓊、宋宣仁の皇太后の幼名は滔滔、朱端朝が娶った妓女の馬瓊瓊、杜牧が愛した妓女の張好好、元微が愛した妓女の謝好好、絵の中の美人の真真、また沈將軍の妾の真真、また元の名妓の趙真真、同時代の馮蛮蛮、妾の趙真真、錢塘の妓女の蘇小小、達希盈盈、官妓の灼灼、王山の接した仙女の吳盈盈、などである。）

（18）『四天王寺国際仏教大学紀要』第34号、2002年3月。

参考文献

- 黎錦熙『爸爸考』，北京『國語周刊』第九十八期（1933年）
- 顏逸明『甌語稱謂錄』，『吳語論叢』，上海教育出版社，1988年
- 清・梁章鉅『稱謂錄』，杭省下城頭巷內賈景文齋刻本，江蘇廣陵古籍刻印社，1989年
- 清・鄭珍『親屬記』，廣雅書局刊本，中華書局，1996年
- 北京大學中文系，『漢語方言詞匯』，文字改革出版社，1964年。
- 曹延杰：《德州方言志》，語文出版社，1991年
- 陳章太・李行健，《普通話基礎方言基本詞匯集》，語文出版社，1996年
- 丁克仁：《平度方言志》，語文出版社，1992年
- 侯精一：《長治方言志》，語文出版社，1985年
- 胡雙寶：《文水方言志》，語文出版社，1990年
- 江蘇省和上海市方言調查指導組，《江蘇省和上海市方言概況》，江蘇人民出版社，1960年
- 李永明：《衡陽方言》，湖南人民出版社，1986年
- 李永明：《臨武方言》，湖南人民出版社，1988年
- 林連通・陳章太：《永春方言志》，語文出版社，1989年
- 盧甲文：《鄭州方言志》，語文出版社，1992年
- 羅福騰：《牟平方言志》，語文出版社，1992年
- 馬文忠・梁述中：《大同方言志》，語文出版社，1986年
- 孟慶海：《陽曲方言志》，社會科學文獻出版社，1991年
- 孟慶泰・羅福騰：《淄川方言志》，語文出版社，1994年
- 錢乃榮：《當代吳語研究》，上海教育出版社，1992年
- 錢曾怡等：《煙臺方言報告》，齊魯書社，1982年
- 石明遠：《莒縣方言志》，語文出版社，1995年
- 田希誠：《和順方言志》，語文出版社，1990年
- 王叔霞：《榮成方言志》，語文出版社，1995年
- 溫端政：《忻州方言志》，語文出版社，1985年
- 楊秋澤：《利津方言志》，語文出版社，1990年
- 楊時逢：《四川方言調查報告》，中央研究院歷史語言研究所，1984年
- 曾光平・張啓煥・許留森：《洛陽方言志》，河南人民出版社，1987年

胡 士 雲

- 詹伯慧：《浠水方言紀要》，龍溪書捨，1981 年
- 張成材・朱世奎：《西寧方言志》，青海人民出版社，1987 年
- 張成材：《商縣方言志》，語文出版社，1990 年
- 張鶴泉：《聊城方言志》，語文出版社，1995 年
- 張樹錚：《壽光方言志》，語文出版社，1995 年
- 趙日新・沈明・扈長舉：《即墨方言志》，語文出版社，1991 年
- 浙江省桐廬縣縣志編纂委員會・北京師範大學中文系方言調查組：《桐廬方言志》，語文出版社，1992 年
- 周磊・王燕：《吉木薩爾方言志》，新疆人民出版社，1991 年